

養成講座の副産物

柏市 花木 裕介

「花木さん、ちよつと良くない結果が…」という切り出しに、僕はドキッと怯える。そして、医師ははつきりとこう口にした。

「のどに、5段階中4段階目のレベル感で、悪性と疑われる腫瘍が見つかりました」

「つまりは……」精一杯言葉を返す僕。

「ええ、はつきり言いますね。『ガン』です。かなり高い可能性で。首の方のしこりは、その腫瘍が転移してきているものと思われま

す」
こんなとき、よく「頭の中が真っ白になる」というけれど、僕の場合は「真っ黒」になった。未来が急に四方向から閉ざされた感じ。うなだれて、なんとか絞り出した言葉は、「マジっすか……」。

どうしよう、家族のこと、仕事のこと。なんだかとてもないことになってしまったぞ。

【出典：ブログ『38歳2児の父、まさかの咽喉がんステージ4体験記！』】

養成講座の面接実習全16回を終えたわずか2カ月後の2017年11月。学科試験を2カ月先に控えていた私は、こうして、人生最大のピンチを迎えることとなりました。

面接実習は、私にとって

「大リーグボール養成ギプス」だった

私が産業カウンセラー養成講座（通信）を

受けようと思ったきっかけは、転職した医療関連サービス提供会社にて、メンタルカウンセリングを生業とする心理カウンセラーたちの中にシニア産業カウンセラーも多数活躍しており、自分自身もまずはそれらの知識や技術を身に着けたいと思ったからでした。

また私は、メンタルヘルスの研修運営を行う部署に在籍しており、自分自身もゆくゆくは講師としても登壇できるよう、その知識面における土台づくりとしての講座受講でもありました。

18名の受講生の一人として、初めて面接実習の会場に入ったときのことはよく覚えています。

「みんなとうまくやっていけるかな」

「先生たちは優しく教えてくれるだろうか」

期待よりも不安の多い初日だったものの、そんな不安は吹き飛ぶかのように、メンバーとは早速その日から昼食を共にし、先生方とも円滑なコミュニケーションを取ることができました。

目的はそれぞれ異なれど、同じ知識と技術を学びたい、という共通項は、思った以上に私たちの連帯感を深めてくれるのだなということに気づかされました。

実習では、毎回のように、カウンセラー役



とクライアント役、オブザーバー役に分かれてのセッションが行われます。「面接実習」というからには、実践中心であることは理解していたものの、正直「ここまで徹底してやるのか！」と驚きましたね。1日6時間半の間ほぼすべてをセッションに費やす日も少なくありませんでした。

勉強中のカウンセラーとして、オブザーバー役の視線を一身に集めながら、クライアント役に対峙するときの緊張感といったら普段の仕事でもなかなか得られないほどのものでした。

クライアント役の話す言葉の中から、特に「感情」の含まれたワードに焦点を置き、寄り添っていく。ついついアドバイスしたくなるようなテーマであつても、自我を押し込め、ひたすらにクライアント役を中心に据えたコミュニケーションを心がける。それは私にとって、さながら漫画『巨人の星』に出てきていた「大リーグボール養成ギプス」をはめていくように窮屈なものでした。

しかし、そのギプスの甲斐あり、私は講座